

自己否定の思想

——高橋和巳『散華』論——

伊藤 益

1

自己は自己であって自己以外の何ものでもありえないという感覚。それは、おそらく、相互理解のもとに他者との関係を構築してゆこうという試みに挫折し、心底を揺さぶるような孤独感に苛まれた魂によって懐かれるのだろう。他者が、自己投影の産物以上の何か、その根源まで見透すことのできない何者かであるかぎり、この感覚は事の本質に鋭く迫るものだとしてよい。だが、この感覚が、自己と他者との関係を問う認識論の枠を踏み超えて、自己の在るべき姿を模索する価値論の領域にまで浸透するとき、それは、自己をめぐる思索の展開を阻害する、頑迷な自己肯定へと転化してしまう。現に在る形で「ここ」を生きる自己が、この形以外の形態をとりえないという思いは、往々にして、この形こそが絶対的に肯定されるべき自己の態様だという認識につながってしまうからだ。

こうした認識の基底に存する言明、すなわち、「わたしはわたしである」という命題は、たとえばそれが対自的思惟を止揚することによって得られたものとしても、「わたし」がわたしを対象化しはじめた、その初発の時点に作用していたはずの、最も原初的で素朴な反省とすら無縁である。「わたしはわたしである」と断じ、しかも、その断定にすがりついて、在りうる「わたし」を追い求めることを拒絶するとすれば、ひとは「いま」「ここ」から一歩も踏み出すことのできない、幼児的ともいうべき固着性のうちにとどまることになる。埴谷雄

高の『死霊』は、こうした固着性のなかでの停滞を「白同律」と名指し、それに対する徹底した排拒の意志を示す（「白同律の不快」）。天折ともいべきその生の最末期の著述群のなかで、執拗なまでに「自己否定」にこだわりつづけた高橋和巳も、自己は自己でしかありえないという、諦念と絶望とに満ちた認識から「自己」を解き放ち、「自己」を精神の新たな展開のなかに投げこもうとしていたのではなかったか。

高橋和巳。左派の論客として、あるいは、内的な苦渋を、観念的な文体のなかに刻みつけるように綴ってゆく一連の小説の担い手として、六〇年代後半にあまたの青少年を魅了したこの作家は、時代の変遷のなかで、いつしか、かつてそういう作家がいたという事実すら忘れ去られるような、いわば片隅の存在となってしまう。文壇における、あるいは、一般の読者層におけるこの忘却は、時代が、もはや彼のような深刻な知性を必要としなくなってしまったことに起因するように見うけられる。だが、このことは、高橋和巳の思索が、時代遅れの遺物、ないしは、古色蒼然とした考古学的文献学の玩弄物に墮してしまったことを意味するわけではない。「わたしはわたしである」という命題の自己肯定性が何ものをも生み出さないという自覚がどこかに定位されるかぎり、いいかえれば、「わたし」が「非—わたし」によって照射されうる可能性が、認識とそれに応ずる行為との展開をめざして希求される場面が存するかぎり、高橋和巳の「自己否定的思想」は、けっしてその意義を失わない。小稿では、一九六三年に、雑誌『文芸』八月号に掲載された短篇『散華』を読むことをとおして、作者高橋和巳にとって「自己否定」とはどのような事態だったのかという点、および、高橋が「自己否定」を要請する思想的位相とはいかなるものだったのかという点を探ってみたい。

高橋は、死のおよそ一年十カ月前、『波』一九六九年七月・八月合併号に「自己否定について」という一文を載せ、そのなかで、こう述べている。

弱肉強食、たえざる生存競争の行われるこの現実で、率直に自覚して自己否定などする者は阿呆である。そんなことでは生きていけない。いわば敵前における自己解体のようなものだから。また、あらゆる生体とその生体維持のために天赋されている諸本能にも、それは反する。そうした中で、あえて自己否定するのは、それゆえに、個体の存否を超える、上位価値概念がその特定の存在の中に想定されて

いる場合に限られる。否定はそれに向けての再生の手続きなのである。

「わたし」をもう一人のわたし（「非—わたし」）の側から照射しつつ、「わたし」の私秘性と「非—わたし」の他者性とを止揚した次元に、展開しつつ定位する自己を見定めようという認識論的な姿勢は、さしあたって、ここには認められないようだ。高橋は、認識論的な次元を超えて、価値論の領域にまで踏みこみ、そこに「上位価値概念」なるものを想定する。彼はほのめかす。その「上位価値概念」へと到達するための、価値論的な行為が自己否定であることを。高橋は、おそらく、つぎのような図式を念頭に置いていたのだろう。すなわち、下位の価値概念に拘泥する自己が、「否定」を媒介として、その拘泥性から脱皮し、上位の価値概念に向かってみずからを揚棄してゆくという、いわば弁証法的な図式を。

認識論上の営みを価値論の領域へと転移させるのは、哲学的にはある種の誤謬を意味するのかもしれない。しかし、高橋は、「見る」立場としての哲学に足場を置いていたのではなかった。彼は、作家として、創ることによって行為する。彼において、「見る」立場、すなわち、哲学的な認識論は、つねに、行為の規範としての価値論へと転化しうるものだった。否、厳密には、その転化は、高橋の内面において、当為ですらあったといえよう。したがって、高橋の「自己否定の思想」は、いつもすでに「行為」への自己投企をめがけるといふ意味で、認識論的な視座を内に孕みつつも、価値論的な態様をよりいっそう濃厚に示すものとなる。短篇「散華」は、このことを、ほぼ全編にわたってあらわにする。

2

『散華』の梗概は、およそつぎのとおり。

電力会社の補償課長補佐大家次郎は、四国と本州とを結ぶ高圧海上架線建設のための用地買収に奔走している。大家は、買収のために淡路島と四国とのあいだに浮かぶ、ある小島を訪れた。そこには、中津清人という、かつて右翼思想家として名を馳せた老人が、ひっそりと

隠棲していた。中津は、戦時中『散華の精神』という、「個の自覚的消滅による民族の再生」を説く書、すなわち、特攻攻撃の精神的支柱となる書を物し、多くの青年たちの「散華」を鼓舞した。自己の破滅的な思想が、終戦の詔勅によって価値的に無に帰して以後、中津は、一切の社会的な関係を断ち、孤島で孤独な余生を送っていたのだ。

中津の所有に帰するその島を訪れた大家は、用地買収の一件を中津に向かって切り出すことができなかった。かつて回天特攻隊員として死を覚悟した体験をもつ大家は、特攻の思想的根柢の構築者が、世俗から隔絶した生を送るさまに接して、愛憎半ばする感情を禁じえず、ほとんど無意識のうちに中津に惹かれていったからだ。一方中津は、大家の度重なる来島を、中津自身に興味を抱いてのことと解した。

何度目かの来島の折、大家はついに本来の目的をあきらかにする。中津は激怒した。特攻隊の生き残りである大家が自己への指弾者となりうることを予想し、その真摯な指弾に耐えようと覚悟していた中津は、大家の来島が世俗的な目的に塗りこめられていることを知り、裏切られたと感じたのだ。「帰れ！」と怒鳴った中津は、日本刀を手にして大家に迫る。中津の怒りは、大家の内面で熟し切らずにいた中津への（ひいては、彼を「散華」の精神へと駆り立てた巨大な力への）憎しみに明確な輪郭を与える。大家は、中津の剣を躲し（中津の小屋の）囲炉裏の鉄瓶を手にしながら、中津に向かって激怒のことはを投げつける。

「人にあざむかれたなどと怒れる柄かよ。糞つたれめが」

「人間の信義などと口はばつたことを言える柄か。いつ死んでもいいなどと傲岸なことを言える柄か。人生二十五年、年端もいかぬ若者が、人生は二十五年、いや、人生は二十年と決められて、自分の死と違つれに、何十何百人の命を海のもくずにししようと、じつと魚雷の中にうずくまって、出撃を待っていたんだ。死刑台に立たされた人間が、不意に死刑がとりやめになったからと首にまかれた縄はずされたら、どんな気持がするか知ってるか？おれたちは国家に生命を左右する権利まで供託した覚えはない。……聞いているのか」

「映画や小説じゃないから、おれをこの世にひきとめてくれる恋人なんてもなかつた。残念ながらおれは真面目であり、恋愛というものあまり高く抽象的に考えすぎていたために、現実には、少女の息づかいや、髪の匂いや汗の匂いも全く知らなかつた。死ぬことが決ってから、機会があつたが娼婦を買いにも行かなかつた。道徳でも、羞恥でもない、それは無駄だったからだ。そうだ。たつた数日しか添えない結婚をした奴はいたが、娼婦などは誰も買いにはいかなかつた。何かを残したい衝動があつたが、快楽をむさばらねば損だという

考えなどは浮ばなかったからだ。追いつめられれば解る。父母を思うことはあっても、快楽を思うことはないのだ。自分が生きていたことの痕跡を残す、種族保存の本能にかられて、まだあいもせぬ幻の妻を思うことはあってもな……。おれはいまは一介の俗物にすぎない。しかし、それゆえに、一人高しとして孤独を守る人間を本質的に信じないんだ。あなたには解るか。やがて死んでゆかねばならぬ人間が、自己の存在の痕跡を残したいと痛切に思う気持が……。斬れるものなら斬ってみろ、あなたの剣でわたしが斬れるはずがあるか」

中津は剣を手にしたまま（小屋の外へと）じりじりと後退する。大家は、中津に向かって熱湯の入った鉄瓶を投げつけた。中津は、顔の半分を熱湯で爛れさせ、自分が耕した畑のなかをころげまわりながら号泣する。孤島で白活しなければならぬ老人にとって、それは無意識的な自殺に等しかった。老人の剣は、戸外の水槽のなかに空しくつかっていた。中津にははじめから大家を斬るつもりなどなかったのだ。

数ヵ月後、電力会社の測量班が、中津の住む孤島に上陸した。測量班は、その島に、崩壊寸前の掘っ立て小屋と、半ばミイラ化した老人の死体とを見た。死体の腹部には軽く刀剣が突き刺さっていた。老人の死と死体の自然のミイラ化は、センセイショナルな話題となり、新聞は、老人の日記を掲載した。日記の最後の一週間は、こう書かれていた。

×月×日 晴天、海あおし

×月×日 今日もまた晴天 海あおし

×月×日 今日もまた晴天 海あおし

×月×日 晴、海蒼しく、風吹く

×月×日 晴、海蒼し

×月×日 ああ、海よ

×月×日 海

『散華』の人物造形は、くつきりとした形をとっていて、そこには、曖昧な人格は姿を見せない。主要な登場人物は二人。戦時中の右翼思想家中津清人と、特攻隊の生き残りでありまは電力会社の補償課長補佐の職にある大家次郎とである。物語は、この二人の葛藤と親和とを

軸として構成されており、その主題が戦時中の「散華」の思想をいかにとらえ返すかという点に存することは、ことさら強調するまでもない。

右梗概中に掲げた大家の発言は、大家が、「散華」の思想が極端な「個」的悲惨を強いたという認識のもとに、その思想の鼓吹者を糾弾する立場に立っていたことをはっきりと示している。一方、中津清人は、これも梗概中に掲げた彼の日記の一節が示唆するように、その糾弾を終始受け身に受けとめる態度をとろうとしている。特攻の思想的根柢を提示し、間接的にせよ、多くの青年たちを死地におもむかせながら、戦後なお自己の生命を保って在る中津の在り方は、ほかならぬ中津自身にとって弁明のしようのないものだったからだ。どんな船にも船長と機関手がいる、船が難破したとき、機関手を犠牲にしながら船長がのうのうと陸に上がって安逸を貪ってよいものか、という大家の問いに、中津はこう応える。

なんと罵られても、わたしは我慢しよう。我慢することのほかに、わたしにはなにもできぬ……。国家主義者にとっては、その国の文化的伝統が、つまりは精神が唯一の拠りどころだ。それゆえにわたしはそれを説いた。精神の物質に対する優越を懸命に説いた。だが、わたしは、わたしが期待をかけた兵士たちと運命をともにしなかった。わたしは、わたし自身が理論づけをしておりながら、その理論の要求する生き方と死に方を十全にはなしえなかった。だから……

発言は、ことばにならない何かを孕みつつ、中途半端なままに終わる。「だから」以下に何がづくのか、それが明瞭にならないかぎり、発話者の真意を解きあかすことはできないだろう。だが、中津清人が、鋭利な批判の眼差しを、自己自身に差し向けていることだけは疑えない。彼は、みずからが理論づけた「散華」の思想のもとに、生命を投げ出したあまたの青年たちと運命を共にすることができなかった自己を恥じ、その屈辱の感覚のゆえに自身に投ぜられるすべての非難を甘受しようとする。

中津のこうした態度は、一見、自身が過去に犯した過誤を謙虚に受けとめるもののように見える。大家もまた、そこに、自己呵責に苛まれた魂を見、その苦渋にまみれた在りように同情をさへ寄せる。大家はいう。「あなたがむやみに自責される必要はないとわたしは思う。

いや必要以上に自責することは、その人の良心のあかしであるよりも、むしろ、なお残る指導者根性の倨傲だとすらいえる。散華の思想はしりません。しかし散華の事実は、あなたの個人的言動には関係はなかったのだから」と。

大家の認識では、ソロモン沖で八十数隻の主力艦船を喪失し、敵の猛威に対抗するための通常的手段を失ってしまった軍部が、一死必殺の特攻攻撃に打って出るのは必然の成り行きだった。特攻兵器は、それに搭乗する青年たちによって建造、改造され、試運転された。上層部の強制だけが、特攻を促したのではない。青年たちの自発性が、それを生んだことも、また、一つの事実である。大家はそう考えていた。だから、大家は、中津の「散華」の思想が、それだけで、単独に、特攻攻撃という悲惨な事態を招いたとは考えない。中津の思想は、「散華」の事実とは本質的に無関係だったのだ、という理解のもと、大家は中津を慰撫しようとすらすらする。だが、この段階では、大家は、まだ気づいていなかった。中津の自責が、思想に対する自己の態度の在りようをめぐる披瀝されるものにすぎないこと、すなわち、それが、思想そのものへの深い反省を伴うものではないことに。

中津は、何ごとかを祈願しつつ、多数の仏像を彫っていた。作者は、中津のその行為が何を志向するのかを具示しない。けれども、それが、失われた多くの若き生命への鎮魂を企図する行為であることは、容易に察しがつく。中津は、失われた生命に対して真摯だった。もし戦後の社会が、「氣取った女がセックスのことをふせるように」「歴史的な恥部」を抑圧した社会、いいかえれば、過去（戦争）を「解明」したのではなく、忘れたふりをして抑えこんだ社会であるとすれば（『散華』の登場人物の一人、大家の友人野呂和義の発言）、老人の真摯さは稀有のものであったとさえいえよう。

だが、中津清人は、「散華」の思想をひるがえそうとはしない。彼は、たしかにそれを公に説くことをやめたけれども、いまなお、ひっそりとそれを守りつづけている。かつて抱懐した思想の可否を厳しく問い、その問いのさなかに血を吐くような自己批判を展開する苦悩の姿を、中津の内部に認めることはできない。彼は、本質的に「非転向」であり、「首尾一貫」している。中津との対立が極まるさなか、大家はこのことに気づいた。だから、大家はいう。「ただ扇動してただけであり、見ていただけであるゆえに、苦しむことも死ぬことも、心を檻樓のようにもみくちやにされることもなかったあなたを、少なくともわたしたちは殴りつけ、たたきのめす権利がある。あなたは非転向を誇る。首尾一貫性を固執する。あなたは扇動しただけであり、見ていただけだったから、それができた」と。

大家のこの発言は、『散華』全編に作者がこめた真の意図が何であったかを明確に示す。高橋和巳は、抱懐された思想がそれを提唱した主体によって決定的に否定されることを、すなわち、徹底した「自己否定」の可能性を追い求めていたのだ。作者にとつて、思想上の非転向と首尾一貫性とは、それが自己照射を欠落させた絶対的肯定性に根ざすかぎり、決定的に否定されるべき態度にはかならなかった。中津清人がどれほど彼の思想に殉じた青年たちの死を悲嘆し、どれほど深い自責の懐こうとも、彼がその思想を静謐のうちに保持しつづけるかぎり、彼は、犠牲者たちの眼差しをただなで、どこまでもその不徹底性を論難されなければならない。作者は、そう考えている。

しかし、孤島での孤独な生を悔恨とともに過ごした老人が論難の対象とされ、札束で人の横つ面を張るような用地買収に狂奔しつつ、戦後社会の垢にまみれてしまった大家次郎のごとき人物が、その論難の担い手となるという事態は、読者に違和の感覚を与えずにはおかない。中津がその自己否定性の欠如を責められ、大家がそれを免責される根拠は何か。『散華』はこの問題にいかに応えるのだろうか。

3

大家次郎は、回天特攻隊を除隊した後、学園に戻り、そこで左翼思想の洗礼を受けて左傾し、卒業後電力会社に入社してからは、資本主義体制を支える企業内エリートとしての道を歩む。その歩みのなかで、大家はかつて特攻隊で培った「死の情熱」を失い、反体制思想を忘却して、体制内の生活者として自己の日常を構築してゆく。構築は、考えることをやめ、過去と現在との思想的矛盾を未整理のまま放棄することによって可能になっていた。すなわち、大家は、「考えることを怠」り、「彼自身を追求することを途中で放棄してきた」のだった。思想的な一貫性を維持する中津清人とは対照的に、大家次郎は、思想的転向を重ね、しかもその転向の内質と意味とを自己に向かつて厳しく問う姿勢を閉却してきた。中津との出会いをおして、大家は思想的怠惰とでも呼ぶべきこうした自己の態様を自覚せざるをえなくなる。大家は、「怠慢の罪に、いま問われようとしている」という意識をもちながらも、しかし、その一方で、自己の思想的怠惰を蔽い隠そうとする。彼は思う。「現在、決して無能ではない企業内エリートとしてのおれの存在が、青春期の自己像と食い違うゆえに間違っているなどという論理はおかしい。平和であること、平穩であること、平凡であること、子供を育て、家庭でいさかい、そして、特に希望があるわけではなくとも、特に絶望的であるわけでない生活を大切にするという態度が、どうして誤りであり虚偽でありうるのか。そんなに自己卑下

し、自己批判して、自己の能力を汚す必要がどうしてあろうか？」と。

せめぎ合う思想、その葛藤に身をさらしながら、終始自己を厳しく律して生きるこのみ、人間の在るべき姿だと考えるのは、おそらく思考の短絡というものだろう。思想上の厳格主義も、日常を生きるという次元から乖離して成り立つわけではない。いかなる思想であれ、人間の口の端にのぼるものとして定位されるかぎり、それは日常の生活者の論理と無縁ではありえない。大家が生活者として体制の内側に生きて在る現実を否定する権利は、誰にもないはずだ。作者高橋和巳は、生活から乖離した観念、実体なき虚構に身を置くことを足とする思想家ではなかった。『散華』の後に書かれた、『我が心は石にあらず』『白く塗りたる墓』（未完）などにおいて、体制内を生きる知識人の、生活と理念とに引き裂かれる葛藤のさまを描いた高橋は、観念の基盤に生活が定位する現実を伶俐な眼差しのもとに見据えていたはずだ。上述の大家の「思い」は、高橋にとって全面的に肯定しうるものではないにしろ、彼の理解の範疇に属するものだったに違いない。

だが、大家は、その「思い」によって、自己の思想的混沌（非一貫性）を糊塗するとき、無垢の農民を札束で威しつける自己の行為とその行為を支える日常生活者の論理とを絶対的に肯定してしまうことになる。大家はそのことに気づかなかつたわけではない。彼は、「死のためにはなく、生のためにする行為は、つねにある種の妥協をとまう。死はひとりで完結するが、生は多くの者でいとなみはぐくまれねばならないからだ」と考えながらも、「だが、しかし……」と逡巡する。大家は、体制内の生活者として「いま」「ここ」に在る自己の態様を、全面的に肯定し尽くすことができなかつたのだろう。しかし、大家の思索は、躊躇とともに途切れるだけで、それ以上の展開を見せない。「だが、しかし……」の後に何事も付け加えようとはせず、ただ一瞬のためらいのみをほのかす作者の描写は、彼（作者）が大家の内部に明瞭な自己否定性を求めなかつたことを告げるといっても、過言ではないだろう。

となれば、『散華』においては、ただ中津清人のみが、その自己肯定的な思想的首尾一貫性を譴責されるべき人物とされ、大家次郎には、自己の思想的足場を括弧に入れて留保したままで、容易に論難をなしうる安全な立場が用意されていることになる。『散華』において、批判は、終始一方的だ。大家から中津に差し向けられるそれは、けっして大家自身をも斬り裂く両刃の剣とはなっていない。かつて「散華」を強いられ、死を眼前にする苦渋を舐めた者が、「散華」の鼓吹者を一方的に論難する。つまるところ、『散華』は、そうした単純な構造によつて貫かれているといわざるをえない。

一九六三年八月一五日、一六日、一七日、一八日の四日間にあつて東京新聞に連載された「散華の世代」と題する高橋和巳との往復書簡のなかで、埴谷雄高は、つぎのように述べている。

さて、ところで、こんどは前代を殺す青年の側の内容に触れることになりました。〈散華〉の精神や〈死の哲学〉について究明を試みようとする貴方は、例えば、「灰とダイヤモンド」の主人公の青年と貴方が扱うべき主人公とのあいだに、また一種歴史の双生児ふうな対比が存することを感ぜないでしょうか。それはつぎのごとくです。「灰とダイヤモンド」の主人公において私達が気づくことは、そこでは〈敵〉を殺すことが先行して、それから自分が殺されるという推移を次にとることです。それに対して、戦時中の〈死の哲学〉が教示したものは、ひたすら自己の死についての意味ある納得であり、ある種の含蓄ある美化であり、と同時に明らかにしたことは、〈死の哲学〉の他の側面であるべき〈敵〉を殺すことについての苦悩も省察もほとんど容れる余地がそこになかったという事態です。

埴谷雄高は、ここで、おそらく『散華』を念頭に置いている。埴谷の書簡の口吻は、全般に高橋への好意に溢れている。「死の哲学」の深淵に肉薄しようとする後進の試みを、埴谷は暖かく見つめているといつてもよいだろう。だが、埴谷は、『散華』において展開される扇動者の「哲学」と煽られた者の心情とが、いずれもある欠落を抱えこんでいることを見逃さない。特攻攻撃は、たしかに、一種の自殺行為ではある。しかし、それは、孤独で無危害的な死をめざすものではない。爆弾を抱えた戦闘機も、人間魚雷も、その大半が所期の目的を達するはるか以前の段階で海の藻屑と消えた。だが、ごくわずかではあれ、目標に肉薄しえた特攻兵器は、一瞬にして多数の「敵」を殺戮しうる。大岡昇平の『レイテ戦記』が冷徹に語るところによれば、対空砲火にさらされて墜落してゆく特攻機から投げ出された肉片（搭乗員の足）が、艦船上の米兵数名を雑ざり倒し、彼らを死に至らしめるという事態も起こった。必死の戦術としての特攻は、その担い手に対して、自死の定めを強烈に意識させた。しかし、その自死は、すくなくとも可能的には、何十何百という他者を道連れにする蛮行でもあつた。「散華」の二人の主要登場人物、すなわち「散華」の扇動者中津清人と被扇動者大家次郎は、この点についての認識を欠き、それゆえに、「散

「華」は、加害の可能性への配慮を欠いた被害者意識によってのみ貫かれてしまう。埴谷は、この点を鋭く批判したのである。

中津は死を煽り立てた自己を見据えるがゆえに、「敵」の死を慮外とする不徹底な形においてではあれ、加害の意識（味方・同胞へのそれ）をその内面に定めている。彼が、煽られた者（大家）の論難を甘受する所以である。ところが、扇動され、死地におもむこうとした体験をもつ大家には、加害の意識が欠落している。彼は、ただ被害者の視点から、「我」ないしは「我」たちへの（終始普遍化されない）加害者を厳しく糾弾するだけだ。それは、被害という事態をいわば一種の錦旗とし、そこに寄りかかりつつ自己を無謬化してゆく心位だったといってもよい。大家は、被害者としての自己をほとんど絶対的に肯定する。そうした自己肯定の精神が、高橋が本来希求していたはずの「自己否定」の精神と本質的に無縁であることは、とりたてて論ずるまでもない。

「散華」の思想に引き摺られる特攻隊員から、左翼思想の信奉者へ、そして体制内エリートへと曲折に満ちた自己変貌の道をたどった大家は、「転向」のたびごとに、自己の心底で厳しい自己批判を展開しなければならなかったはずだ。しかし、作者の描くところによれば、大家はけっして自己批判を徹底させることがなかった。「散華」は、作者の意図はどうであれ、大家を本質的に自己肯定的な人格として描いてしまっている。自己肯定の立場に立ちつづける人格が、他者を、他者の自己肯定性のゆえに論難する姿は、傍らからそれを眺めた場合、陳腐としかいえない。中津清人が彼の思想的「貫性の背後にある自己肯定性のゆえに、同じように自己肯定に固執する大家次郎によって非難されるのを妥当とする根拠は、どこにも見あたらない。中津への論難は、風化する特攻体験をいのがけて現実のなかにつなぎとめながら、しかも、特攻の意義そのものを現状のなかに否定しつつ止揚しようとする、明晰で激越な意欲をもった人格によってこそなされるべきではなかったか。つまるところ、「散華」は、ただ中津のみが責められ、大家がすべてを免責されて弾劾者の立場を堅持しうる根拠をあきらかにしえていない。その意味で、この作品は、発表当時の文壇の高い評価にもかかわらず、作者の思想を十全に汲み尽くした成功作とはいえないように思われる。

だが、作者高橋和巳の「自己否定の思想」は、登場人物の単純な二極化（扇動を責められる者とそれを非難する者との二極化）をとおして、まったく無意味なものとなってしまったのではない。高橋は、戦争という「原体験」をめぐる自己の思索と苦悩とを、一人の特攻帰りの男に託することには失敗した。高橋は、しかし、「原体験」を自分自身の外側から操った人物の自己肯定性に対する疑義を徹底させるこ

とによって、みずからの「自己否定の思想」に鮮明な輪郭を与えることには成功した。以下、すこしくこの点に論及することをもって、小稿の結論としたい。

4

小松左京に『戦争はなかった』という短編がある。それは、唐突に太平洋戦争など起こらなかったとされる世界に紛れこんだ、血塗られた戦争を「原体験」とする中年男を描く不思議な作品である。

男は多次元世界の一つに闖入してしまったのか、あるいは、彼が根本的な勘違い（記憶の誤り）を犯しているのか、その理由は定かでない。ともかくも、男は、人間関係や外観に以前の世界とは寸分の相違もないのに、ただ太平洋戦争だけがなかったとされる別の世界に、気がつけば、いつのまにか生きていた。太平洋戦争があろうがなかろうが、現在の男の生活（物理的なそれ）には何の変化も、何の支障もなはずだ。彼は、彼以外のすべての人間がなかったと主張する太平洋戦争を単純になかったと思いきみさえすれば、新しい世界のなかでごくふつうに生きつづけることができたはずである。ところが、男は、太平洋戦争はなかったという彼にとっての新たな「事実」に、どうしても馴染むことができなかった。太平洋戦争の勃発と敗北、戦後の混乱という事態の結果としてのみ現在の社会がありうると、論理的に考えたからではない。彼がいま生きている社会には、何か痛切なものが欠けている、「つらい認識」とそれをおして得られた「おぞましいきびしさ」が根本的に欠落しているような感じがし、その感覚にどうしても耐えることができなかったからだ。やがて、男は、大きなプラカードを掲げて、日比谷の街頭に立つ。プラカードには、

「戦争はあった、

多くの人々が死んだ、

日本は敗けた、」

と大書されていた。

男は、道行く人々に向かって、懸命に戦争を語った。「特攻隊で死んで行った、自分の先輩たち、彼の目撃した、空襲のあとの死骸の山、

栄養失調で死んで行った人々、面白がっているとしか思えない機銃掃射に、頭蓋をふつとばされて死んだ小学生、飢餓と蒸発、広島長崎の惨禍、言論思想の弾圧と、拷問の中で死んでいった人々、占領地での軍隊の暴虐、敗走と玉碎……。ことはつまると、彼は歌をうたった。「わが大君に召されたる……」「ああ、あの顔で、あの声で……」等々。道ゆく人々は無関心なまなざしを向けるばかりだった。ほどなく、「日比谷の角の、あのさちがい」の噂が界限に広まりはじめたころ、警官と精神病院の患者護送車がやってきて、男を強制的に収容する。激しく抵抗する男は、護送車に乗せられる瞬間まで叫びつづける。戦争は本当にあったのだ、と。

小松左京は、単に、複合世界を仮想するSF的趣向にのみもとづいてこの作品を書いたのではないだろう。敗戦後二十三年を経て、高度経済成長の波は、物質的な豊さを人々のもとにもたらした。繁栄を謳歌する戦後社会は、かつての戦争についてその惨禍の意味を問うことを怠るという形で、戦争の記憶を忘却の彼方へと放擲した社会にほかならない。小松は、そのことをめぐって鋭い風刺を展開しているのだと見るべきだろう。戦争体験を風化させることは、悲痛な心情の消失を意味し、その消失が日常の生を支える重要な何かを無化してしまう。そこには思想の皮相化が起こり、何処からともなく人々の心に無思慮の闇が忍び寄る。小松はそう考えていたのではなかったか。

学生の頃、小松は、高橋和巳とともに「京大作家集団」に属していた。雑誌『京大作家集団作品集』はわずか五号で途絶え、私秘的な次元ではともかく、作家として、思想家としての両者のその後の交流は、学生時代ほどには緊密さをもたなかったらしい。しかし、歩む道を異にしながらも、小松と高橋は、同じ主題（戦争）にこだわり、異なる手法によって、その主題（戦争）を作品化した。小松が既刊の『散華』をどこまで意識していたのかは、彼の作品群を克明に追う手立てをもたない小稿の関知しうるところではない。しかし、かりに無意識裡にしろ、小松が高橋の志を受け継いでいることだけは疑えない。戦争体験の風化された現況への異議は、小松と高橋のあいだで共有されていたといっても過言ではないだろう。

小松には、SFという表現形式を選ぶことによつて、提示すべき異議が直線化するのを巧みに避けた節が見うけられる。意図の曲線化は、『戦争はなかった』を、戦争の風化という事態に対する深刻な反省とは異質な次元で、すなわち、SF的娯楽の位相で受けとめることを可能にした。多くの読者は、それをただ面白い読み物として読んだであろう。小松が作品の娯楽化への志向を抱いていたか否かは定かでないけれども、すくなくとも、『戦争はなかった』が、娯楽として享受される性質を抱えこんだ小説だったことは否定しがたい。

一方、高橋の「散華」は、いかなる点においても娯楽を志向するものではない。「氣取った女がセックスのことをふせるように、日本は戦後、歴史的な恥部の大抑圧をやった。解明したんじゃないやなくて抑圧したんだ。今はみな、きれいさっぱり忘れたようなふりをしている」という大家の友人野呂和義の発言に集約される、高橋の現状認識は、小松のそれに比べてはるかに直線的だ。その直線性は、作者の意図から一切の隠蔽性を除去し、提示される異議をあらわなものにしてしまう。その意味で高橋の作品は、小松のそれよりも単純である。高橋は、従来、観念的で晦渋な作家と目されてきたが、すくなくとも、作品の意図の提示の仕方に関して、彼は、小松のような具象的描写に長けた作家以上に、具体的だったといえよう。

高橋は、自己の存在がそこに定位される現況を、小松よりもさらに具象的に、「戦争はなかった」社会、すなわち、現在の繁栄がそこから発出するところの本来的な「原体験」を風化させ忘却しつつある社会ととらえていた。風化と忘却の波は、着実に、主人公大家次郎の内面をも浸食している。企業内エリートとして考えることを怠ってきた彼は、自己の特攻隊体験を振り返り、そこに渦巻いていた過去の思念を「いま」「ここ」の時点において発展的に止揚しようとはしない。現在に活かされない過去は、幻影のように記憶の片隅を齧くだけで、やがてかならず長い人生のなかの芥子粒大の点と化してしまう。大家の未来は、過去とのつながりを欠き、それゆえに、持続する精神性とは無縁な、一瞬一瞬に断片化される粒子のごとき時間となるに違いない。

では、もう一人の主要な登場人物中津清人の場合はどうだろうか。「散華」した人々の魂の鎮魂を企図して、木彫りの仏像を作りつづける中津の姿は、一見、風化や忘却とは対蹠的な相貌を呈しているかのように見える。だが、かつて国家至上主義の立場から、国家に殉ずる死を称揚した中津が、現在の国家の存在に無頓着を装う姿を描くとき、高橋和巳は、その姿のうちに、大家のそれとは別種の風化と忘却とを見とっている。

「散華」は、大家との対話のなかでの、中津のつぎのような発言を記す。

この島に隠遁した時、確かにわたしは国家主義者だった。そして、ひとたび思想を思想として、他者に、とりわけ青年たちに説いた以上は、その説いたことに対して責任があると考ええるゆえに、わたしはみずから一切の公職、一切の社会的交わりから隔絶した。日本人

が自信をとりもどしつつあるという君の紹介は、なおわたしの心に響くものがある。しかしわたしは、もう国家主義者ではなくなっている。それは時代の潮流に屈して転向したのではなく、かわり身はやく自分を有利な位置におこうとして、意匠がえをしたのでもない。わたしは、十七年間、この孤島に、なに一つ国家の恩恵をうけず、宗教の援けもかりずに過ごしてきた。わたしはこの十七年間の苦勞を通して、乏しいながら悟るところがあったのだ。わたしにとって、国家は必要でない。わたしが、どの民族の一員であるかというよりも、海の波の音以上の意味はもたない。わしはこの腕と、この乏しい器具で、自分の寢床を作り、自分の家を建て、自分の畑をさりひらき、魚を獲り、蟹をつき、貝をひろい、野鼠を食って生きてきた。わたしがなお日本語を覚えているということと日本人の一員に数えられるなら、わたしはこの言葉も忘れてもいい。わたしには、鷗の叫びがわかり、猫の意志を理解できる。わたしにはそれで充分だ。わたしの暮はこのせまい島と広い海であり、わたしの音楽は風と松の梢のひびき、そして海の渦と嵐だけで充分なのだ。

友と認めうるものは鷗と猫のみ、松籟や海の音が自分の音楽だと語り、国家・社会から完全に隔絶され遮断された自己の在りかたを強調する中津の論理は、子どもでさえもたやすく論破できるほどに単純である。『散華』の設定では、中津には忠実な漁師の弟子がおり、彼が時おり淡路島と孤島とのあいだを往還して中津を援助している。その弟子の存在が中津に命脈を保たせている点を衝けば、中津の論理は根底から崩れ去る。こうした子どもじみた論理に固執し、果ては、「わたしは、国家を、世界を、民族を、聚落を、人類を拒絶する」と叫ぶ中津の思念は、かつて筋金入りの国家主義者であった彼の思想的退行を示すといつかいようがない。そういえば、『散華』が末尾に掲げる中津の最後の一週間の日記（前掲）は、思想的退行の結果招来された一種の失語症をものごとくもたるといつても過言ではないだろう。

作者高橋和巳は、こうした思想的退行のなかに、「原体験」の風化と忘却とを見いだしている。戦時中にみずから鼓吹した思想の責任をとって自閉する中津は、たしかに、自己批判の精神に貫かれた人格ではある。しかし、みずからが宣揚した思想にもとづいてあまたの血が流された事実、中津の内部ですでに霞がかって遠ざかりゆく記憶と化してしまっている。「原体験」の風化と忘却を非とする立場は、中津の内面のこうした態様を許容することができない。高橋は、そうした立場から、大家の口を借りながら、中津に対してあえて「自己否定」を迫る。

『散華』という作品を以上のように読むとき、高橋和巳が求めていた「自己否定」の内実が鮮明な形をとって立ちあらわれくる。すなわち、高橋は、かつての戦争のさなかに特攻という極限状況に身を置いた者、あるいは、そのような極限状況を意図的に現出させた者が、その極限状況をどこまでも身に受けつづける位相において、「自己否定」が成り立つと考えていた。その場合、「自己否定」とは、単にある思想を表出した自己の不徹底性や挫折を反省することであるよりも、むしろ、かつて懐いたその思想を根底から突き崩し、それによって、自己の安穩な現況を全的に拒絶することを意味する。いいかえれば、戦争という「原体験」の風化と忘却とをどこまでも拒否しつつ、その「原体験」を現実のものとして生きながら、さらに、「原体験」の基底となった思想そのものを何かに向かって（何かのために）否定してゆくことこそが、高橋の考える「自己否定」だった。

ただし、高橋和巳の「自己否定」は、虚無をめぐらしての自己破壊ではない。既述のごとく、高橋は、「自己否定」の前提に「上位価値概念」が措定されなければならない点を強調している。『散華』に関しては、「上位価値概念」が「国家」と同定され、個々人の「散華」が「自己否定」として称揚されるという事態を求める心性が、高橋の内部に巣くっていたかのような錯覚を導くおそれを否定できない。しかし、人間の自由な「個」としての側面に重きを置く高橋が、「上位価値概念」として「国家」を想定していたとは考えられない。高橋は、おそらく、「国家」を超えた何かを「上位価値概念」ととらえようとしていた。その「上位価値概念」をめがけて、自由な「個」としての人間性が、十全に拡充される次元。そうした次元に自己を定位させるための第一歩として、まずは、現況に甘んじる自己を思想的に解体してゆくこと。高橋和巳の「自己否定の思想」は、それをこそめざすものだった。

『散華』から六年後、高橋和巳は、学園紛争に対する自己の立場を鮮明にする書『わが解体』を公表した。この書のなかで、高橋は、変革の運動とそれを担う精神のうちに次代の雛型が含まれていなければならないことを強調しながら、つぎのように述べている。

そして、やむを得ず身にまとう神秘性に対する、未来に向けての贖罪としての自己否定とはなにか。それは常に自らの姿を全的に開示しようとする理論の形成であり、いま一つは敵に向ける刃を自らにも向けてみる殆ど文学的な自己告発の精神である。

「敵に向ける刃を自らにも向けてみる」という姿勢は、ついに『散華』の主人公大家次郎のとりどころとはならなかった。その意味で、『散華』は高橋和巳の思想の核心を十全に表出する作品とはなりえていない。しかし、『散華』は、「原体験」を風化させ忘却する者に向かって無限の「自己否定」を要請する作品だった。そこには、後の『わが解体』が孕んでいたのと等質な未来志向性が存していたと見ることができるとはでないか。『わが解体』に至ってもなお、高橋が志向した「上位価値概念」の内実は判然としない。けれども、高橋が未来に向けてある可能性を掻き探ったことだけはたしかであり、しかも、未来へのその希求は、『散華』をも貫いている。『散華』は、「自己否定」の思想家高橋和巳を未来に向けて跳躍させるための踏み板だった。

(二〇〇一年五月十六日稿)

※本論文は二〇〇二年一月二五日刊行の拙著『高橋和巳作品論―自己否定の思想―』（北樹出版）に収載された。本論集への本論文の投稿時期が、拙著刊行の初発の段階よりも数ヶ月先行することをここに記して、重載のやむなきに至った点についての弁明としたい。

Self-Denial Thought

On Takahashi Kazumi's *Sange*

Susumu ITOH

自己否定の思想

Takahashi Kazumi is famous for his self-denial thought. His brief life was spent for criticizing his ideology, philosophy and aesthetics.

This paper aims at resolving the essence of Takahashi Kazumi's self-denial thought. When this aim is attained, we will be able to make clear an important feature of Japanese Postwar's thoughts.

In this paper I analyzed the context of *Sange* which relates to the self-denial thought of the author. The conclusion is as follows.

Takahashi Kazumi thinks that the thinkers who theorized and justified the Kamikaze Attack must seriously criticize themselves. Because the Kamikaze Attack was practiced by the young men who committed their lives to the nation-state. Though the nation-state does not have a right to drive the people into the suicide, Japanese regular army ordered the soldiers to kill themselves. So the theorists who theorized the suicide attack must deny the basis of their being. But the self-denial must not be the criticism for the outside attitude. Takahashi thinks that the theorists must deny their essence and inside radically. According to Takahashi's *Sange* we can arrive at the new phase of thought through the self-denial.

However Takahashi's theory is not complete. Because he overlooked the fact that the suicide attack would be the genocide. Concerning this point we have to say that Takahashi failed to see through our characteristic as assailants.